

第八章 年中行事

第一節 総説

竹野町の年中行事は、まとめてみると、内容が豊富であり、大切なもので現在まで残っていることも予測していたよりも多いことが分かった。

その中でも、特に目についたものを列記する。正月行事では、田久日の「そうの声」、これは羽入の送りなどの同行事と比較してみると、神迎えと神送りの行事ということになり、但馬では今のところ私達の調査範囲では外にない。どんどでは、特に小丸では正月・節分ともに迎え・送りの両方を現行している。特に節分は少ない例に入る。これに下村でかつて行なわれていた正月の両どんどについて、明らかにそのルーツと思われる修験道の柱松はしらまつ神事の容相を多分に持つており貴重な事例であった。この両地区に乳原・井垣両「鬼の家」(修験道行者の子孫)があることも見落してはならない。またどんどの火を迎えてかまどの火をつける例(小丸・芦谷・金原)は聖火を家に迎える事例として注目される。年迎え・蓬萊のまつり場など、みせと台所(いろりのあった部屋)が重要視され、特に台所でいろりを囲んで行事を行なうことを、かつてこの火を神聖視し、家のまつりの中心であった名残りが今でも認められる。また蓬萊の「とび」は年玉としだまであり、これはその家の正月さまの分霊であるが、これに対する信仰もまだ生きている家がある。しめかざりにつける「蘇民将来そみんしょうらい」の

札も、竹野谷の真言宗寺院は出しているが、これも但馬では珍しい例であるとともに、その信仰の伝播に同宗寺院がかかわっていることが指摘出来る。

一月九日の山の神行事に、男の子供組がかかわっており、特に、羽入・草飼・中町の「がんだ綱」は注目される。但馬海岸部にこの類の行事があり、一つには子供組の仲間入りの要素もあるように思える。同十四日（後に六日に多くが変わる）の狐がりも行なわれていたし、羽入あたりは現在でも残している。今は行なわれていないが、草飼・中町が、この時井戸に対して行なったことは面白い。井戸をあの世へ通じる穴とみたてている。嫁のしりはり（「祝い」と竹野ではいう）は現在でも切浜あたりではほそほそながら行なっている。

節分では、虫の口封じも、羽入・笠浪幸右衛門家や切浜の年寄りの間では行なわれている。同家の豆を頭ごしに投げる行事も今となつては珍しい。三月のひな祭では、人形のルーツ、内裏びなの前、土びな・押びな、各親の家で作って一人に一体を贈ったものを使った時代が意外に近い時代まで行なわれていた。芦谷ではこの日女の子の仲間入りを行なっていた。卯月（四月）八日の行事も盛んであった。この場合、大岡寺が主要な存在であった。川すそ祭も、龍海寺でかつては盛んに行なわれていた。

盆行事では、須谷円通寺檀家（芦谷・須谷）で行なわれる初盆の「あらじよう棚」は、民俗的には貴重で、但馬では現在、香住町から浜坂町にかけての海岸部に、庭に立てる盆棚がみられるが、それ以外では珍しい例。門谷では「ねらみさば」をおくる。一般には「さしさば」といい、両親のそろった家では、親にこれ供える例で、かつては多く行なわれていたが、現在では珍しい事例となる。特記出来るのは、田久日の「盆小屋」、今では行なわれないが今回の調査で再興していただいたが、全国的なレベルでも貴重な例と思える。

旧八月(九月)十五日のいも名月も、比較的広く行なわれている。

第二節 正月の行事

(1) 正月行事

正月迎え

十二月に入り、正月迎えの準備が行なわれる。次に順番に列記する。

事はじめ すす払いについては、一般にきまつた日はなく、年末に行なうことが殆どである。

しかし、三原では、同十三日を「事はじめ」といい、同日に行なうという(谷村藤夫「昔の年中行事」万葉十三号)。この日を正月迎えのはじまりとする点参考になる。

解除 真言宗寺院では、すす払いがすんだ後、檀家のお祓いをして回る。一般的には「荒神祓い」といい、いろいろまたはかまどの祓いに回り、寺であると真言宗、他の宗派の檀家には神主、その他修験者がこれをつとめる。

例えば、羽入両界院『山内年中行事』によると、檀家田久日・羽入・阿金谷を十四日から回る。御幣・けずりかけ(水神の札がつく)と蘇民将来の札を持ち、「幣ヲユルリニ立テ、横座ヨリユルリニ向ヒ、九条錫杖・心経一卷・諸真言等」をあげるとある。けずりかけは若水汲みの時に使われ、蘇民将来の札はしめかざりに使われる。ちなみに、但馬で正月にこの札を出し、しめかざりに使われているのは、竹野町轟の蓮華寺、羽入の同金亀院・両界院、浜の龍海寺だけのようにある。

餅つき 一般的に「九」の日はさけ、二十八・三十日に行なう家が多い。切浜では、家族のエトに当たらな

い日、金原では「九」の日よりも「丑」の日をきらうという。これも「エト」の日である。切浜では、戸主または長男がつき初めをし、最後に、つく人は「千石」、とり手が「万石」というと、一同「やれめでたい」といった（五〇年位前まで）。羽入の笠浪幸右衛門家では、主人がつきはじめ、最後に「千石・万石」というと、一同が「めでたいめでたい」という。芦谷・安谷家では、年男が竈かまどのたきつけに豆がらに火をつける。最初のつき手・とり手は、主人夫婦がし、神に供える餅からつき、どんと餅は菱型にとる（按谷重行「安谷家伝記」以書名だけを註す）。

大晦日の行事 先ず年送り（年越）の行事であるが、宵に鎮守社参りをする。切浜では、神のしきに米・神酒を入れて参るが、道中竹の垣根の枝を折り箸とし、各社に供え、最後の愛宕社に納める。芦谷・安谷家（前出）では、鎮守社に年の瀬参りをし、最後の膳（年越のそばでも可）、年越風呂に入り、親戚などに年の暮れの礼回りに行く。これを除夜の鐘が鳴るまでに行なう（前出）。羽入・笠浪家（前出）では、寺（両界院）に紋付に扇子で行き、「結構な年おくりになりおめでとうございます」と挨拶に行く。一般にイロリを囲み、夜をあかしたのであるが、夜食として、にぎりめしに山椒の実入りのみそをつけて食べる。下村では俵形であった。羽入では豆腐を焼き、山椒みそをつけ、こんにゃくを食べる。

神迎への行事としては、田久日の「ソウの声」が特色がある。現在では、丁度、正月に入る除夜の鐘のなる時、地区の青年が、鎮守社の拜殿にこもっており、一同ここを出て海に向かい、ときの声をあげる。音頭とてが「ソーノ声を借り申そう」というと、一同「ヨイヨイワア」とはやす。これを繰り返し、終わって観音堂の庭にいき、また海に向かって同じ動作をする。これを地区の人は、同じ平家落人伝承のある香住町御崎の人と呼び合ったのだと説明するが、これは後の羽入のどんどの項でもふれるが同じ動作をする。これらを対比して

みると、田久日のは神迎えのときの声であり、羽入のは神送りのそれである。同地区では、昔は、日の入り・零時・夜明けの三回行って解散した。宇日でも、明治末から大正の初年までは行なっていたという。

次に迎え火の問題がある。中町では、宇日神社前に氏子各家から藁一把を持って集まり、神主当番が主催し迎え火をたいた。子供は「ヒーコージャア」と叫びながら行ったという(花房喜代次「昔の正月の行事」万年書十三号)。

どんなの事例としては、貴重なものが下村にあった。乳原五右衛門氏の話によると、地区の入口にどんどを行なう田があり、大歳の晩、大人達(男)は大どんどをたてた。かしの木二、三本をしんとし、竹を周囲にめぐらし、下部に藁をおく。高さは一〇^{以上}もあつた。同じ場に子供組は小どんどをたてた。高さは六、七^{以上}あつた。特に大どんどに火をつける時は、これをつけた人には一年中御利益があるといつて、皆が競つた。どんどの周囲を藁束を持ってぐるぐる一同が回り、その先は火がつきやすいようにもみほぐした。一人が火をつけようとすると、これをみた近くの人が競つて消した。小どんどの点火の場合は、これがなかつた。大正十二、三年まで行なわれたという。

どんなは、修験者が柱松の神事を広めたと考えられている。下村の場合、その姿がよく残っている。この神事の場合には、二本大松明を立て、山伏(修験者)が、二人これによじ登り、どちらが先火をつけるかを競う。祭の時の柱松には、下から火をつけた藁を投げ、火がつくのを競う。現在、但馬でこの神事が残っている唯一の例は、日高町松岡の十二所神社で三月十四日に行なわれる俗称「ばば焼き」の神事である。これには、熊野比丘尼の末えいである同町野々庄の旧神主家朝尾家が介在していると考えられる(日野西風定「平家落人伝承と熊野」養父町史第一巻頁五八二―三)。下村では、乳原まきは、正月にしめかざりもせず、節分には豆まきもしないが、この系統の家は「鬼の家」

といわれる修験者の末えいである。恐らく、同家がこのどんど行事にかかわりを持ったものと思える。

小丸では、現在でも同日晩どんどをたく。神主役が組み、準備をすると、各戸から藁・豆がらを持ちより、同役の点火でもやす。神さんを煙で迎えるという。各戸では、この火をいただいて来、かまどにくべた。正月に新しい聖火を迎えるのである。同地区では、正月の送りどんど（七日）、また節分の迎え・送りどんども行なっている。正月にしめ・松を立てぬ井垣まきがあり、やはり「鬼の家」の子孫と思われる。どんどの普及にこの系類の人々の介在があつたと思われる。

正月迎えの行事とし、田久日の「ソウの声」は羽入の送りどんどと関連し、管見するところ、まだ但馬の他の地区からは見付かつておらぬ貴重な行事である。また下村のどんど（迎え、送り）も、残念ながら現在行なわれていないが、小丸が現行しているのは参考になる。

正月の 門松 但馬全体では、海岸部は松、山奥の地方ではかやの木（がやまつという）を門松に使う
かざり （日野西眞定「但馬のし」
めかさり「まつり」²⁸）。竹野町も松を使う地帯にある。一般に、男・女両松で、三車（三段に枝が

ある）がよいという。そして、松を切つて来るのを「花切り」（田久日など）といっている。常緑の松も、生花・造花同様、「花」の中に入るのである。田久日では、山を持たぬ人も、正月の松は他人の所から自由にとつて来たと、山の共有時代の名残りが認められる。下村ではもとの部分を割木で囲んだ。宇日では、庭に杭を二本立て、これに結びつけた時もあった。羽入では、男松に実のひらかなないもの（金玉きんぎょという）をつけたのは、こつてい（おす牛）が生まれるからいけないという。昭和五十年ごろ、一時、町が門松を印刷した紙を配った時があつたが、これではもの足りなく、現在でも松が使われている。しかし、男松ばかりで、小さいものとな

っている。

中町では、年越しの時、土蔵をしめ、節分と同じ、ひいらぎとじゃこを竹串にはさんだ「鬼の目刺し」を出入口と窓の外に指した。これを「戸前を打つ」という(花房喜代次「昔の正月の行事」万年青十三号)。これは、「鬼の目刺し」が門松と同類であることを示す。

このほか、金原では、「さいとり木」という、ゆるだの木を切った(長さ五、六〇センチ)のを祀り、正月が終わると鎌の柄にした(同地区赤目五郎右衛門家、七五年位以前)。田久日でも、狐狩りが行なわれていたころ(昭和三十年ごろまで)には、この木を二本、家の入口に立てておき(頭部を二つに割っておく)、二日の仕事はじめに刀(男の子)、木槌(女の子)を作つて親戚に贈つた。これも、門松の一種と考えられる(詳しくは、前出「但馬のしめかざり」の小論)。

しめかざり しめかざりには別に特色はない。長いのと輪かざりがある。芦谷では、紙幣・ゆずり葉をつけ、七・五・三に藁すべをたらす(前出「安谷家伝記」)。切浜では、これに鬼の目つきと俗称するかやの葉を加える。長い方のは、神棚・床・入口、輪かざりは、仏壇・荒神・水神・蔵の入口、作業場などに祀るのが一般的。海岸地区では、船小屋・船に祀る。白にも注連をまき、箕の上に餅・柿・楢柑を供えた時代もあったが、殆ど行なわれなくなった(金原の例)。下村の乳原まきは、門松・かざりはなく、また豆まきもしないが、こうした例は但馬の他の地区にもある。

餅花 餅は、現在では、白餅、すなわち餅米をほとんど使っている。しかし、羽入・笠浪幸右衛門家では、餅米・粟・栃を入れて作っている。お鏡は床に供えられる。金原・右近三右衛門家では、床にお鏡三膳、神棚・

仏壇・蔵・作業場などには小餅にみかん・干柿・栗をつける。芦谷・安谷家では、お鏡を床（三三）、神号の軸（三つを掛ける）、神前（九）、恵美須棚（三三）、小餅を大戸口神・水神・鎮守（地神力）・臼に各二膳を供え、神酒口にはゆずり葉を立てる（安谷家伝記）。宇日では床に七福神の軸を祀るので七膳お鏡を供える。箸は松の木で、家族も同じ箸で正月には食事した。切浜では神棚には一二膳供えるというが、これは月の数と思える。

この中で餅花は特色がうかがわれる。俗に餅花木といわれるくろもじの木が使われるが、芦谷・切浜では女木を使うというが、これが一般であろうか。切浜では、白餅を先に穂とし、幹の部分にも巻きつける。二〇^位位のもの、松とともに、神棚（二）・仏壇（二）・各入口（二）・床（一）に立てる。神棚のは昔は一^位余りあった。しかしこれは豊作を祈り、稲などの穂にみたてたもので、下村では、一・五^位位ものを、台所（いりりのある間）の神棚の前か、みせの間（戸口より上った間）の平もんに立てかけた。近年は小さくしたという。床瀬でもみせの間に祀った。神棚またはみせの間が主点となっている。羽入・笠浪幸右衛門家では、現在でも白餅・栗餅・栃餅をつけている。別に宇日・切浜・羽入など海岸に近い地区では、神棚に、藁六筋を二組にし、計一二本、これに粟と餅米を半々につけ、一組にし、神棚に下げた。別に笠浪幸右衛門家では、仏壇（二組）・神棚（一組）・床の正月さんに（一組）を供えている。宇日は昭和のはじめ、切浜では、二〇年前まで行なっていた。笠浪家では現在も行なわれている。これを下す時、「稲木おろし」といい、稲の穂にみたてて行なうが、この点については後述。稲及び粟を主とする農作物の豊作をあらかじめ祈るものである。

床かざり 竹野では、正月に迎える神さんは、一般に「正月さん」という。床に七福神（宇日）、天照皇大神と鎮守三宝荒神（切浜）、天照皇大神・八百万神・北辰鎮宅靈符神（芦谷・安谷家）、神農さんと七福神（金原・

右近三右衛門家」とまぢまぢである。切浜では、主婦が、箕・枳及び白米二升（二俵にみたてる）を入れた紙袋を供えた（昔）。

蓬菜 これはもと、中国の神仙信仰から起こつた仙境の一つ。そこには不老不死の仙人が住んでいるという、理想境である。蓬菜盆は、もともと祝儀・酒宴の作りものとして使われた。正月にこれを祀るのは、近畿・中国地方に広く行なわれている（日本国語大辞典）。竹野町では、現在でも多く行なわれている。この蓬菜盆が、正月のような神事に使われると、神に供えたものを人がいただくという神人が共食するという意味が生まれる。家人が先ずこれをいただくことは、正月の神様と一体になることを示す。また、正月礼に来た人におけることは、同家の正月の神と同人が一体となる。つまり、参つた人は、同家の正月の神様をいただくことになる。特に蓬菜に供えられた「とび」は、中に米粒など少量しか入っていないが、同家の正月の神であり、これを供えたり、いただくことは、これを供えたり分けたりすることを意味する。年玉は、今では正月にもらう小遣いをいみするが、もともとこのとびと同じ意味のものである。

竹野町では様式は大体一致している。羽入の笠浪幸右衛門家では、三方に白米一升を盛り、頂上にみかん（昔はだいたい）一つを昆布でまき、水引でむすぶ。松の小枝を立てる。四方に小さい丸餅（白二列・栃・粟餅各一列）を五つに割り、上から段々に下に列べる。すみに串柿を家人の数だけ置く。勝栗もすみに置く。ひねりとび（米を少量包む。紅白の帯をし、表にゆずり葉をさす）をすみにおく。同家では一つ置き、分家に正月の挨拶に行く時、これに白米一升をつけて行く。正月礼に来た人は、先ず蓬菜に礼をし、次に主人に挨拶をする。みせの間に置く。芦谷・安谷家では、三方にやはり米一升、昆布をまいたみかんを頂上、周辺に串柿・勝栗を並

べ、とび（中に米三、五粒。じゃこ二、栗一を入れる）を数箇おく。家族が正月中祝膳に使う柳箸をすみに置く。串柿は年とり柿という。床柱の前に置く。大体、この両家の例は共通している。しかし、笠浪家のように白・粟・栃餅を使うのは、殆ど他にはないのでなからうか。

金原では、先ず床に置き、台所（いろいろの間）の神棚の下にさげて来て置く。朝起きて、身づくろいをした者は、あきの方に向かい、これをいただく作法をして、正月の神を同人は身に受ける。置く場所は、田久日・宇日・切浜・金原が台所の神棚の下。羽入・下村ではみせの間、芦谷・床瀬は床となる。本来は、台所かみせの間が使われた。特に台所にはいろいろがあり、家の中の信仰の重要な間であった。また蓬萊が正月の神様の御神体的存在として重要な存在となっていることが分かる。

元 旦 除夜の鐘がなり、正月に入ると、先ず行なわれるのが、年男（戸主）によって行なわれる若水

若水 汲み 汲みである。羽入の笠浪家（前出）では、戸主が、阿界院けじよの時にいただいたけぎりか

け（水神の真言のあるもの、現在では小御幣）と札を持ち、桶（ばけつ）にしめ縄とゆずり葉をつけたものを持ち、笠浪家一統の使う井戸に行き、「フクドソブリ」と三回唱え、水を一ぱいに汲んで来、茶をわかす。お福茶である。芦谷・安谷家は、年男が先ず起き、洗面、蓬萊を拝礼、とび一つを持ち、桶と臼に張つてあるしめを手にし、井戸に行き、その年のあきの方に向かってとびを供え、水を七杓半汲む。お釜に若水を入れ、豆がらに火をつける。この時の火は、去年からの残り火を使うのである。本来なら、新年には、昨年からの残り火は消し、新しい火をつけるのであるが、この点、問題がある。むしろ、どんどの火をいただいたて来、かまどにつけるといふ例が二つほどあるので、こちらに移行していると思える。お福茶には、切浜では、昆布または梅

ほし、金原では、普通のお茶または昆布を入れるという。

なお、羽入・笠浪家では、亀藏氏（昭和七年叙）の代までは、大晦日の晩、なべ取りとなべ敷台を作り、大川（竹野川）に行き、竜神さんに供え、「お供えします。使つて下さい」といい、後をふりむかずに帰つて来たという。これをどう考えるかの問題であるが、やはり若水迎えの行事の一端かと思え、この項に書いておく。

年取りの膳
若水でお福茶がたけると、先ずイロリのある台所の間で、同茶及び蓬萊の干柿（年柿）をいた

だき祝膳をたべ、宮または寺参りをするのが一般。

金原では、蓬萊を床から台所の神棚のすみに移し、明けにむかいこれをいただき、イロリを囲み、お福茶・おとそをいただき、食事をすませてから、宮及び寺（蓮華寺）に参る。下村では、みせの間に祀つてある蓬萊の前で、東の方にむかつて拝み（明けの方の意味）、干柿をいただく。台所のイロリのなべ座に一同が座し、お福茶と柿をいただき、宮参りをしてから後で食事をいただく。芦谷では、表座敷で一同がそろい、床にある蓬萊に向かい拝礼、串柿・お茶をいただいで年をとる。台所から表座敷へと移行している。

その他
切浜では、元日にはほうきで掃除をしてはいけない。土蔵に出入りしてはいけない。そのため

に大晦日までに掃除をし、正月に必要なものは調え正月を迎えた。また芦谷・安谷家では、二日も年男は若水を汲み（現在も三日まで行なう）、四日から主婦は平常どおりに朝起きをし台所仕事をする（前出）。以上をみると、特に元旦はじめ三日間はいみ籠る時であったことが分かる。また安谷家の二日乃至三日まで若水汲みをする例は他にも少ない例だと思えるが、三日間は年男の役であったことが明確に残る例として注目される。昔は、一般的にも、こうしたことが今より嚴重に行なわれていた。

ことはじめ ことはじめの日である。昔はこれを嚴重に行なっていた。大体、男は打ぞめに藁で草鞋など、女

(正月二日)

は縫いぞめで袋など、子供は書き初めをし、これはどんどでもやした。打ぞめに、切浜は牛を

飼っていた時代には牛の綱、羽入では牛のつなぎどめ、下村ではなべ取り、なべ輪(いろりのあつた時代、これを作った地区も多いと思われる)を作った。女のつくつた袋でも、鬼神谷では「はる袋」といった。芦谷・安谷家(前出)では、紙袋に蓬菜の米一つかみを入れ、どんど立てに持っていく、これを下にまいた。床瀬では、女は麻のいとをあんた。三原では、地区全員(男子カ)が当番の家に集まり、その年に使う橋のつなぎ縄や、日役のもっこ・ふごを作り、終わって懇親会をした。

その他、海岸地区である田久日では、のり初めといい、船の上に乗し、御飯・スルメ・みかん・干柿を供えて拜む(現行)。芦谷・安谷家(前出)では、湯殿はじめて湯に入る。天井のあまだに「あまだ餅」(または「氷餅」)をあげる習俗もあった。これを六月一日に下して食べるが、中町では、この日はのぼりはじめといい鏡餅の一重を持ちたかに登ってこれをつるした。これを食べると夏の水当たりなどしないといわれた(前出)。これも昔には一般的に行なわれていた。羽入・笠浪幸右衛門家では、鍬はじめといい、さいとり木の頭を割り、寺(両界院)からいただいた牛玉札を折って指し込み、苗代口に立て、田を起こす動作をした。田久日では、狐が行なわれていた昭和三十四年位までは、この日にさいとり木で刀(男)、長刀の刃の部分(女)、柄は竹(当家)、槌(初子の女の子がいる親戚)をつくり、打ぞめといった。

この他、芦谷では、同日に主婦の廻礼が昔は行なわれていた(谷家伝記(前出)安)。また羽入では、分家に蓬菜に供えてあった「ひねりとび」と米一升を持ち、挨拶に行き、御馳走になる。また昔からの習慣として隣地区の松

本には一日ではなく同日に正月札に行く。伝承によると、庄屋彦左衛門が年貢に対し強訴し一日に打首になったので、この日をさけるのだという。

寺の年頭

芦谷では、正月三日檀那寺円通寺の住職の年頭がある。昔は籠に乗って来たという。お供が「円通寺年頭」と呼ぶと、戸主達は道端に出て迎え、年頭の挨拶をする。この時、同寺からの大般若のお札が配られる（『前出』）。これは両院の『山内年中行事』にも、四日に同寺住職は、一山寺院である金亀院住職と同道し、両院檀家松本・阿金谷・羽入を回る。この時、祈禱札（牛玉札）と地区三役には附木一把ずつが配られた。これは他の寺院もこの日の前後に行なっていると考えられる。

棚おろしと稲木おろし（正月四日）
 お鏡をおろす行事を、「お鏡おろし」（宇日・中村）とも、「棚おろし」（芦谷・羽入）ともいう。また「鏡ならし」（金原）というところもある。金原・右近三右衛門家では、床にお

鏡を三膳供えているが、この日に二膳を下げ、残る一膳は、二十五日天神さんの祭りの日までそのまましておく。この行事を四日に行なう意味については、『安谷家伝記』(一)（前出）の記述が参考となる。三日までの年男の役は終わり、主婦が通常どおりに朝起きをする。この日主人はお鏡などのお供をおろす。別に、各お鏡の前にゆずり葉にのせて供えてあった膳（なま）などもおろし、これらをまぜ、餅も加えて炊き、「福明（あか）し」といい、あらためて神仏に供える。これを見ると、正月さまを嚴重に忌みこもって祀ったのは、この三日間であったと思える。六日に、棚おろしをすることもある（切浜・草飼・宇日の一部）。これは、翌七日の神送りを行なう前日に当たり、そのために移行したのであろうか。同日に餅花をおろす地区がある（宇日）。六日に行なうのがあり（切浜・羽入）、これを「稲木おろし」という。これは十五日正月の時代には、十一日に行なわれた

のが、旧暦から新暦を実際の生活に取り入れるようになった時が多いようであるが、この時に、鏡おろしと同時に行なうようになったと思える。「稲木おろし」については、十一日の同行事の項に記す。

六日の年越し 七日正月は、月の運行を実際の暦の中心と考えていた時代、朔日より十五日が重んぜられた。

と七日正月 現在では、これを小(古)正月という。その一週間前、しかも望(月が太陽のかけにかくれる)

に当たり、物忌みに入る時であった。このころに七日正月と呼ばれ、六日はこれを迎える年越しの日と呼ばれるようになった。一日正月が一般に重んぜられるようになると、次第に松の内の最後の直会の日と呼ばれるようになった。七草粥も(七種の穀物堅粥つまり御飯)も、日本の古い風習であるが、中国の春のはじめに若菜を食べる風俗の影響か、若菜の粥となった。七草ばやしは鳥追いの予祀の行事である。つまり悪いものを追い、その年の豊作を祈る行事なのである。こうした習俗が一般に普及したのは室町時代だとい(以上西角井正慶『年中行事』辞典の記述の略記)。

竹野町では、六日を年越しといい、七日正月の呼び方も残っている。芦谷の例をあげると、六日年越しに、主婦は風呂をたき、主人は入湯し、せりを持って来、神前に供える(『前出書』)。七日の七草は、せりだけというのが多く、七草ばやしも広く行なわれていたが、現在ではごく少なくなっている。粥には、蓬萊の米を使うが、正月に供えた餅を入れるという例が多い。

これらの点をもう少し詳しくいうと、宇日では、せりと水菜、下村では蓬萊の米に、餅・せり・豆腐、その他草飼では七草(せり・はこべ・すずな・すずしろ・なすな・ほとけのぎ・ごぎょう)を入れるのが本来であるが、あるものだけで間に合わす(小林清治『草飼部落の昔の行事』「万年草」十三号)。七草ばやしも少しずつ文句が異なる。採集した中でい

うと、芦谷では「七草・八草・唐土の鳥が日本の国に渡らぬ先に」、金原では「七草なずな、唐土の鳥が日本の国に渡らぬ先に」、床瀬では、「七草、七草、唐土の鳥と日本の鳥が渡らぬ先に、七草七草」と唱える。金原では現在でも行なっているという。根本的な唱え唄の違いではなく、伝播上、少しずつ記憶違いが生まれたものと思える。こうして悪いものを鳥に託して送り、その年の豊作を祝った。

下村では、大正十年位まで、この日に成り木せめをした。各家の柿の木にやいとをすえるといい、子供達があなたなどを持ち各家の柿の木を回り、「なるかならぬか、切つてやる」といった。

どんど 神送りのためのどんどは、古くは十五日に行なわれていた。現在でも今回調査した中で、芦谷・

(正月七日) 床瀬など僅かではあるが、従来通り同日を守っている地区もある。しかし、多くが七日に移行している。その時も、金原・切浜の八〇年位前、中町の「大正七年頃までは、正月と盆は、旧暦で十五日正月だった。新暦になって、七日どんどとなった」という花房喜代次氏の記述(『前出書』)は参考になる。ここで、現行のどんどについて記述するのがよいかと思うが、これ以外の行事の関係もあるので、本来の順序を追い、十五日の項に回す。

年 祝い 中町・草飼などでは、正月の家族の生まれた年のエトに当たると祝った。草飼では、神前に供えた三方の干柿と、焼祝といい、餅の焼いたのを頂いた(『前出書』)。中町でも同じこ

とをしたが、松の内三日間の中に当たると、しめの内に二回あるので喜んだ(『前出書』)。

屋 祈 禱

金原では、井津家には、終戦前までは、蓮華寺から屋祈禱に来ていたという。この屋祈禱は、仁王経を読んだ。真言宗寺院はこれを行っていた。これが次第に廃されて現在では殆ど行な

われていないが、このことから終戦のころまでは行なっていたところがあったとわかる。両界院『山内年中行事』（明治三十八年改）によると、正月六日の項に、「当日ヨリ仁王経ニ掛ル、申込ミノ順序ニ依ルベシ、然レドモ、往古ヨリ仁王経ハ、十日迄ニ羽入村ヲ幾ラ申込人アリテモ済マシ、十日ノ昼ヨリハ、阿金谷村ノ日侍ヲ兼テ、同村総代ノ仁王ヲ読ム例ナリ、仁王ニハ、必ズ既ニ調シアル札ヲ持参シ、先方ニテ幣一本切ルベシ」とある。

仁王会は、もとは鎮護国家のための法会であるが、これが各家の祈禱に使われるようになった。同『年中行事』は、明治三十八年に書き改めたところなので、江戸時代以来の行事記を同年に書き改めたものと思える。そして、少なくとも同年のころには、また盛大に行なわれていた。

本祈禱に出す札であるが、大札一枚、杉原で作り、中に「奉レ読ニ誦仁王般若経全部一家内安穩（祈）処」「奉レ演ニ説如意珠経全軸一身心安樂祈所」という札二枚を入れる。如意珠経というのは、如意宝総持王経であらうか。この中の前の仁王経の小札は、別に一一枚を刷って祈禱する家に渡す。これは、(1)富貴自在を祈り床柱、(2)子孫繁栄を祈りおなんど、(3)諸願成弁を祈り大黒柱、(4)衆魔悉除を祈りなべ座、(5)蚕養如意を祈りたて座、(6)七難即滅を祈りはしり、(7)悪魔降伏を祈り戸口、(8)息災延命を祈り馬屋、(9)五穀豊饒を祈り庭大黒柱、(10)七福即生を祈り蔵、(11)最後の一枚は、仁王札ではなく般若心経の最後の文句「ギャティギャティハラギアテイボウジソワカ（梵字）」を刷ったものを背戸口にはる。諸悪を払うという意味であろう。また祈願全体の成就を祈ってであらうか。以上一一枚に大札を加えると一二枚となる。これは月の数であり、一年中の安穩を祈るものと思える。この札は、現在でも各檀家に配られている。

山の神

山の神には、狩人・木こり・炭焼きが祀るものと、農民が祀るものと二系統がある。竹野町の場合、春・冬の二回、九の日に祀ることが多く、農民が祀る方が基盤となっている。一月と十二月の九日に祀るケースが多く、これは春は山の神がおりて来、田の神となり、稲作等を守護し、秋には役目を終えまた山に帰るといいう信仰に基づいているといわれる。また山の神は、男・女・夫婦の神とする各説があるが、女の神の場合、赤い腰巻をはき、お産の神としても信仰される(柳田国男「民」俗学辞典)。

竹野町でも、正月のは子供の行事とする所が主流を占め、一般の戸主やまた炭焼きや木コリなども祀った。十二月の場合、山仕事の人、若衆などが行ない、子供が行なう行事はないといっている。

まず正月の子供の行事を紹介する。中町・草飼でも行なわれていた。同じ内容であるが、草飼の場合には、男の子達が、朝、神主当番の家に集まり、竹の先に御幣をつけ、準備が調うと、家に帰り赤じゅばん(女の神の赤い腰巻にあやかっただものであるか)を着、白足袋はだしになり、年長の大将が、御神酒と洗米を持ち、お寺(少林寺)の上方の三宝荒神に納めた。道中「山の神ナー、お神酒詣りナー、後向くナー」と皆でいいながら、一同御幣のついた竹を担いで走って行き、社前に納め終わると神主当番の家まで後をふりむかずに帰っ



写146 同右 (「ハタケモチ」)



写145 羽入・山の神行事 (つきぞめ)

た。着物を着かえ、小豆御飯と豆腐汁の御膳についた（「前出書」）。

羽入の場合、構成人員は中学校卒業（昔は高等小学校）までの男子。宿は昨年長男の生まれた家、もし二人以上があれば、早く生まれた方、もし該当者がいない時は、それまでにやってもらえなかった長男または二男の家が当たる。山の神は、隣の松本地区との境に小川があり、その羽入側の田のあぜに、高さ五〇センチほどの長円形の自然石が二基あり、それが御神体である。当日、各家から米一合ずつ集め、さらに松本の山の神も羽入側にあるので、金亀院（松本は同院の檀家、羽入は両界院の檀家）に行き、五合もらい、これに五合を加え一升にし、御幣八本を作ってもらう（両界院への札とする。残った米は宿で洗い白で生のままついて「ハタケ餅」というまゆ玉型の御供をつくる。つき役は本年の宿の子とされ、親が代わってつく。一方地区各戸から稲藁一把ずつ集め、若い者（男）が集まりガング網（長さ約三メートル）と七・五・三をなう。七・五・三は輪の形にしたものを、各七・五・三輪、藁の束にさし込む。竹の葉のついた高さ二メートルほどのもの七本を切つて来、ガング網に四本、七・五・三にも各一本ずつさし、各々を持ち上げる。御幣も網に四本、七・五・三に各一本立てる。

以上の準備に午前中かかり、終わると宿から行列を組み出発する。先頭に御神



写148 同右
（「ガング網」をかかげる一行）



写147 羽入・山の神行事
（先頭に立つ当人）

酒と御幣（一本）を持った当人（赤子の時は親が持つ）、その後にはガンダ綱を持った四人、続いて七・五・三が続き、地区を横切って山の神へ進行する。道中、一行は「山の神なーこーな食ってちゃ参り」を繰返して唱える。山の神の前につくと、当人（代わって親）が御幣、ハタケ餅と御神酒を供えるが、この時御幣の竹を折っては立てる。終わって、一行はさらに境の小川の土手へ行く。松本地区の一行も同じように来ており、両地区の子供達が向かい合い、ガンダ綱や七・五・三を川に流し、竹を折りこれを振りまわしながらはやしたてる。家に帰り、ご馳走になるが、以前は小豆御飯にケンチャンであった。ハタケ餅は、地区中に配り、家中の人が焼いていた。この行事は、子供の健康のために行なうのだと地区民がいつているが、ガンダ綱に厄をつけて流すことが主体であると思える。また、羽入の場合は産子の家が宿をし、行事に参加するところから、仲間入りの要素もあると思える。この行事は昭和三十三年までは毎年行なわれていたが、子供が少なくなり、同四十九年に特別行なわれたものの記述である（〔日野西眞定「年中行事」
「旧馬海岸」事】）。その後は殆どと絶えてしまった。

このガンダ綱については、類似の行事が、近くの草飼と中町で行なわれていた。草飼では、正月七日、この日は鎮守鏡宮神社の縁日だとする。子供達（男）は、六日に神主当番の家を宿とし、地区中から藁一、三束ずつを集め、大綱と



写150 同右（川ペりをたたく）



写149 羽入・山の神行事（御幣を折る）

七・五・三の飾りをつくった。三つあみにし、これに飾りをつけるが、朝・昼・晩各飯と名づける。大綱の頭の部分は一抱えもあった。七日の朝、神主当番を先頭に、御神酒・御洗米を持ち、子供達がならんで綱をかつぎ、「チョンチョン」といながら、神社まで運び、神前の大樁二本（南の方が頭）の間にかけ、注連縄とした。この綱を「願開き綱」と同地では称していたが、羽入のガンダ綱と同類と考えられる（『前出書』）。中町でも同じ行事が行なわれ、「ガンダ綱」と羽入と同じ呼び方をしている。期日は、六月七日の鎮守社の縁日で、最後に、鎮守社前に草飼同様、注連として掛けた（『前出書』）。この「ガンダ綱」という呼び方は「勧請綱（かんじょうづな）」のなまりと考えられる。なお小丸では、簡単であるが子供組が現在でも行なっている。十二月九日も行なっており、大人の職人の同講とは別の存在である。

これらの三行事は、同類と考えられ、もとは正月の山の神の神事だったと思える。この意味では、羽入の行事が正統に伝統を守って来たといえる。正月の子供による山の神事は、香住町沖の浦では現在でも行なわれており、同町隼人でも昔行なわれていた。子供による山の神祭りは、但馬の海岸部に多くあった。

前記したが、宇日では、六日に切りぞめに山に入り、木を一本切ったという。



写152 同右（山の神）



写151 羽入・山の神行事（「ガンダ綱」）

この他の事はじめは二日に行なっているので、この日の切りぞめは、山の神事に近い日に行なわれることから、この行事に関連する初山入りかと思える。なお、山の神の日には、山に入ってはならないというタブーも広く、現在でも行なわれている。金原では、春の山の神の時には、一緒に植え込められる。秋には一緒に木と数えられるという。下村では、山に入ることは勿論、割木にさえふれてはならなかった。

稲木おろし 十五日正月の場合は、十一日に行なわれた。餅花をおろすことをいう。芦谷の例でいうと、年

(正月十一日) 男が餅花を下し、箕の中にしごき取る。これを一升枙で一石・二石と数えながらすくい取り、一二石で終わる。閏年には一三石を数える。枙の中の餅花を祝餅の汁にしたし、神の敷に乗せ、神前・仏前などに供える。餅花木はかまどで燃すか、清らかな所に納める(『前出書』)。

床瀬では、餅花をしごくのを「稲をこく」といい、羽入では「稲こきやー」いながら行なう。以上で、餅花自体が豊作を祈つてのかざりであり、これをおろす時に、その特色がよくわかり、予祝の行事と考えられる。現在では、宇日のように鏡おろしをする四日に一緒に行なったり、切浜・羽入のように七日正月の前の年越しの時(どんどを燃す)に行なうようになった。

狐狩り(また 十五日正月の時代には十四日の晩の行事であった。これが、七日正月に神送りをするようになは狐がえり) ると六日に移行した。昔は竹野町でも海岸地区では広く行なわれた。現行しているのは羽入位のようにである。

先ず名称であるが、「狐狩り」(羽入・中町など)または「狐がえり」(田久日・宇日・草飼など)の二つがある。これを神戸新聞社刊『兵庫探検』(『民権』(六十三頁))でも問題にしているが、「狐がえり」は、正月の神送りに関

連し、農業の守り神自身、またはその使いに狐がみたてられ、これを正月の終わりに送り帰すという意味ととられる。「狐狩り」は、その狐の信仰が転落し、悪いものの代表的存在として、これを神送りと同時に、追い払う意味に変質したものかと思える。とにかく、現在では、この意味のものと考えられている。

代表的な事例を示すと、田久日の場合は次のようであった。昭和三十年ごろまで行なわれた。勿論、近年は七日正月の前日六日に行なわれていた。小中学校の男の子（昔は旧小学校と旧高等小学校で、後者の生徒が長となり統卒）が行なう。前年から当日までに生まれた子（男・女）があると、おばさんがうぶ着を赤子に着せ背負う。刀（男子）や長刀（女子）は同女が代わって持つ。その家は、他家の子供に頼み、親戚から贈られた

刀（男子）、又は木槌（女子）を縄で段々に二組みをつくり、竹を担い棒にしてかつぐ。行列をする子供達は鉢巻をし、刀二本を腰にさし、太鼓を叩き、朝九時ごろ、先ず宮参りをし、女子、親達に見送られ出発。地区内各戸口を回り、はやしことを呼びながら回り、最後に海岸の断崖のところに来、「沖の国におい出す」と叫んで、刀や長刀（槌も）な



写153 田久日の狐狩り
（田久日・根兵秀太郎提供）

どを投げ捨てた。終わって、頼まれて刀や長刀を持った子供は、その家に行き、昼食をよばれた。子供達は、全員晩には神社の拜殿におこもりした。隣の宇日でも、ほぼ同じことをしたが、ただはやしことばを唱える時子を背負った人が音頭をとり、「よものがりよものがり」というと、一同が「狐がりそうろう」と応じた。子供を背負った人、つまりうぶ子が中核となっている。

羽入では、昔は十四日、現在は六日に行なう。構成は男の子、生まれた赤子から小学校の児童全員。近ごろは人数不足のため女の子も加わる。長男が生まれると、母親の家では、正月前にさいとり木（ゆるだの木）で大小刀（一トギ・一トギ）七〇（セシチ）位の二本を作り、赤子の家にとどけておく。家では蓬萊などと一緒にみせの間に祀っておく。この時、ゆずりはとひいらぎの葉をつけ、水引で二本を一つにくくっておく。当日、これの子供の背に押しつけ、その後うぶ着で背負い、刀は母が持つ。子供達ははち巻をし、太鼓を打ちながらはやしうたを叫び、地区をねり、山の中に入ると刀で木や地面を叩きながら進む。山中にある両界院（檀那寺）に行き、かき餅や豆をもらって食べて帰る。寺から帰り、松本との境に行き、両地区の子が、小川をはさんで向かい合い、「松本のがんだーめ、人見てすつこんだ」とはやしたて、小石や雪を投げた。負けると、古狐が自分の村に来るので一生懸命頑張った。今日では、相手の松本では行なわなくなっており、簡略化されている。

以上三地区のを比べると、田久日・宇日の男・女ともにその出生を祝うのに対し、羽入では男の子だけである。後者の方が、古式を残していると思える。

草飼・中町では、井戸に狐を追い込む。草飼では、十四日の夕食後、男の子で十二から十五歳までの者が、

神主番の家に集まり、遊びながら夜のふけるのを待つ。午後一時ごろから、御幣を持ち、宮の近くの井戸のある家に行き、皆が御幣をふりながら、大声ではやす。それが終わり、村中の井戸の有る家に行き、またはやした。終わって御幣は、西町の下り松の川に流した（前出書）。中町も同様であるが、この井戸に狐を追い込むというのは、井戸を境、つまりこの場合は、この世とあの世の境であるが、これに見立てているところに興味が持たれる。

以上行事内容についてふれたが、次にはやし唄を紹介し、その意味を分析する。

〔田久日〕

（行き）狐狩りそうろ、わいらなに狩ろうや、狐・たぬき・しかがえり

（帰り）狐がりに出ん人は、しりに蓮が出るといや、なーんぼ出るといや、四〇・五〇出るといや、よいよ
いわあー、

〔宇日〕

（赤子側）よもの狩り、よもの狩り、（子供一同）狐狩りそうろ、

〔草飼〕

（はじめの井戸）狐狩り、ぎやりな、狐ぎやりに出んもんは、尻に蓮が出るといや、何んぼ何んぼ出るといや、四八出るといや、

（他の井戸）何々の山神さんの狐を、向かいじゆにほいやって、鍋もかまども塩鍋も、ねぶらしようといや、わりや何狩るいや、みこと五取んに雇われて、狐ぎやりそうろ、向かいじゆうの奴等に、喰わせたいものは山

椒か、こしょうか、毒の物を混ぜて、狼汁に猫なます、酢が過ぎた。

〔須谷〕

狐狩りそうろ、小丸の奴らに何々喰わしよ、狼汁に猫なます、酢が過ぎた酢が過ぎた（隣の小丸側の子）、

須谷の奴らに何々喰わしよ（谷垣ひろ子「消えない昔の思」
い出」『万年草』第十二号）。

以上をみると、宇日のはやしが簡潔でその意味をよく示している。田久日の行きのもそうである。帰りののは、全員の参加をすすめる意味、さらに草飼の後半、須谷のは、隣接地区とのやりとりである。このはやしは、やはり正月送りに際し、邪悪な害するものを追い出そうとする目的のものと考えられる。これらは、すでに狩を悪いものと見立てる段階に生まれたものであろうか。

嫁のし 一般的には、「嫁のしりはり」という。祝い棒で、男の子が、昨年来新しく来た嫁の尻を叩いたり祝いで回る行事。但馬でも現在、養父町能座などに僅かに残っているだけである。成り木なまきぜめの

ように、嫁の尻をたたき、健康な子供が生まれることを願う。これを神送りの時、帰る前に正月さまに祈る。

竹野町の場合、切浜では、現在でも行なわれている。十五日正月の時代には、十四日の晩であったが、現在では六日の晩、地区中の子供、もとは男の子だけだったと思えるが、新しく嫁に来た家を回り、「嫁の尻を祝いましよ」と呼ぶ。当家では、用意しておいた菓子袋を与える。中町・草飼でもかつて行なわれていたが、尻を手で叩いた。僅かであるが、尻叩きの習俗が残っていた。神戸新聞社刊『兵庫探検』（五三頁）によると、三原でも行なわれていた。竹野町では一番整った形で行なわれ、十五日の朝（本来なら十四日晩の行事）、子供達（男の子カ）が藁をたばねたのを持ち新しく嫁に来た家に行き、「男三人、女三人、あわせて六人生まっ

しゃれ」といいながら叩いた。また藁を三つ組になったものを、戸口にかけたという。

神送り 神送りは十四日の夕方から準備にかかり、十五日に行なわれた。しかし、芦谷などごく僅かな（送りどんど）地区以外は、大正七年のころ（中町）旧暦から新暦に変わるころ、現在のように六日から七日の行事となっている。

旧例を残しているものとして、芦谷の例をあげる。十四日午後二時ごろ、主婦は食事の用意、主人はお供えをし拝む。これを神送りと考えている。お供えを下げ、正月の間立てていた松などの花を下げ、門松なども下し、一括したばねる。暮方、神主当番の「ドンドヤ」という声で、一同どんど立てに、これらを持っていく。終わって餅を焼く竹を切りに「籾入り」をする。神前・仏前の花を立て、入浴。十五日の朝、「ドンドヤ」の声で、皆が行く。火は誰がつけてもよいが、その年の明きの方に向かってつける。竹にはさんだ菱形餅を、火にあぶらせるが、昔は竹の元の方も焼いて、そのはじり具合で、その年の稲作の早・中・晩稲かを占った。子供は、書き初めを持ち、火の盛んな時に、燃やし、火の粉が高くあがるほど上手になる。どんどの火は頂いて帰り、かまどの火をつける。箸袋もここでもやし、小豆粥の餅を焼く。主人は、お灯明をつけ、焼いた餅を供え、お粥をごくわずかずつ供え、拝む。終わって祝膳につく。

次にときの声（そうの声）をあげてどんどを行なう羽入の行事を紹介する。六日に狐狩りがすみ、引きつづいて、子供達は、村中を回り、両界院（檀那寺）から昨年発行したけじょと仁王会の御幣を集める。各家では、これで家を浄めてから渡す。子供達は、これを藁でくるみ、人の目にふれぬように堂のすみにかくしておく。昔は、よく隣の松本の子が取りに来、逆に羽入の子も取りに行き、争いがあった。太鼓取りもあったので、こ



写154 どんとでそうの声を唱える (羽入)

れもかくした。一方神主当番（これを竹野地区では神主と呼ぶ。当地区では、この行事が終わって新旧交替を行なう）が、明七日のどんどの準備をする。どんどは地区入口の四辻で行なう。各家では、夕方、しめかざり・松・昨年の牛玉札・書初めなどを棚から下し、みせの間の奥にこもをしいて置き、灯明をともし、蓬萊の米で小豆飯をたき供える。

七日の朝六時ごろ、神主が「ドンドヤー、ドンドヤー」と地区中を回ると、各人も同じように叫びながら、ざるにしめかざりなどを持ち、二・五ト位の青竹の先に餅と昨年の牛玉札、書ぞめをはさみ、豆がら二把を持って集まる。一同がそろくと、神主が火をつける。そのころ同地区にある観音寺の両界・金亀両院住職が、お経（立義文りゅうぎぶん）をあげ、両住職が竹を火に入れると、一同もこれにならう。終わると、神主が扇子を持ち、そうの声（ときの声）の音頭を出す。「天下泰平と唱えましょう」一同「おー」、「家内安全と唱えましょう」一同「おー」、「五穀豊じょうと唱えましょう」一同「おー」、終わって、雪をざるにしいて灰を持ち帰り、家の周囲にまく、松の燃さしを持って帰り灸をすえる時に使う。

以上であるが、要点をまとめていく。先ず、しめかざりなどの始末であるが、羽入のように、全部を集め、みせの間の奥に

むしろを置いて置き、一晚灯明などをあげておく例は、切浜など浜地区に多い。どんどを作ることを「どんど立て」という。今では六日の夕方に行なうが、これにかかわるのは、中村・床瀬・羽入のように子供（男）で、各家から藁などを集めた例がある。これを狐狩りなど関連してくると、子供が主体となるのが、古体ではなかったかと考える。阿金谷では、同地区の花垣長左衛門氏（故人）の話では、組み立てたどんどの中に、子供がこもった時代があったと聞く。三原では、どんど立てを行ない当番の家で日待をして、明け方まで飲食し、翌十五日朝、神送りをした。これは日待のもとはおこもりであったという姿をよく示している。

どんどを行なう所を「どんど場」という。田久日・宇日・切浜など浜地区は、海辺が多い。他の地区では村境などが通常である。どんどを立てるには、樹木・竹をしんにし、藁を周囲におくのが普通で、一本。ところが、下村では迎えどんどと同じように、大どんど（大人）と小どんど（子供）二本を立て、大どんどの点火は先を争う。修験道の柱松神事の姿が濃く残っている。中村でも昔は二本立て、一本は十四日の夕方、一本は十五日の朝早く焼いた。これはもと二本同時にもやし、点火を競ったのが、こうした姿に移行したと考えられる。別に、共同のを一本立てるが、もし昨年死者があった家は、別に燃やすのが通例である（中村・中町など）。なお立てる時、宇日・芦谷のように、とびの米をまく所もある。淡路島などは個々に送る例が多いが（前出「但馬」海岸下項）、但馬全般に、共同で行なう例が普通で、竹野町もこれが認められる。

羽入のときの声（その声）は、迎えどんどの項で書いておいたが、神送りのためのもので、珍しい例である。書ぞめをもやす例も普遍的で、現在でも行なっている所が多い。中村では「天下泰平」などの文句を書いた。餅を焼くのも多く行なわれているが、切浜では「ねしぎ」を使う。芦谷の竹の柄の方を焼き稲作の占いを

行なったのも珍しい例だと思える。芦谷・中村などは夔型であった。これが古い形かと思う。多くは焼いたのを持ち帰り、家族が分けて食べるが、煙にくすぶらすだけで、家に帰って改めていろりで焼く（中村・田久日）のは、どんどの煙に合わすだけでよいと考えたのであろうか。この餅を粥に入れて食べる所もある（切浜・床瀬）。灰を持ち帰って家の周囲にまき、魔除け、また蛇などを除けるという例も多い（切浜・羽入）が、灰をなめる所もある（田久日）。松の燃えさしを持ち帰り、門にさす（田久日・宇日）例もよく見かけるが、いろりの所に置く（金原など）例もある。これをやいとの時を使う所も多い（金原・中村・床瀬・下村）。この系統で注目されるのが、芦谷・金原の、松に点火して持ち帰り、家のかまどの火をつけるという例である。正月の火を各家にいただいてくることは、京都の愛宕神社の「こけら火」をはじめ、各地に行なわれている。これと同じ系統のもので、この日が浄火を自分の家に迎える日であったことも考えられる。この火は、一年中消さずに保ち、新しい年にまた浄火を迎えたことが基本にあつたのではないかと推察される。松の燃えさしを家に迎えるのも、このことの一つ退化した姿かとも思える。最後に、床瀬では、神送りした後、小松菜を新しく供えた。何か信仰的意味があるのであろう。

念仏の口明け 一般には、正月十六日を「念仏の口明け」といい、十二月中に「念仏の口止め」を行なつてい（正月十六日）る。正月を「はれの日」とみるに對し、仏事を「け」の行事とみるからである。

竹野の例をみると、芦谷では、十二月三十一日に正月のおかざりをはると同時に、仏壇の鐘はしまう、これを「鐘おさめ」という。正月十六日、神送りが終わった翌日、はじめて鐘を出して打つ「鐘はじめ」といっている。地区では主婦等の観音講が行なわれる。百万遍の念仏も行なわれており、三原では、正月十六日からは

じめ、これを「念仏の口明け」といった。森本地区の市場・神原では、現在でも行なわれているが、一月十六日と盆八月十六日から始まる。この両日を「念仏の口明け」といつている。特に市場地区のは観音像の軸箱に享年年間（一八〇一―〇四）にはじめられたと記してあるという（〔井越武三「珠数繰り行事について」
「万年書」十周年特集号）。須谷でもこの両日に百万遍が行なわれていた（〔谷垣ひろ子「消えない昔の
思い出」
「万年書」十二号）。森本地区の場合、両日を「念仏の口明け」といつているのは疑問が残る。百万遍の行事の詳しい記述は、盆の項にゆずる。

待ちごと 特定の日に、近隣・仲間が寄り集まり、一夜眠らないで籠り明かすことを総称して「待ちごと」と

（日待・月待）という。月待は正・五・九の十五日やひまな時など、日待は月齢に関係ある十三・十七・二十三日の各夜に多く行なわれる。いずれにしろこもりなので、徹夜するのが原則であるが、俗には、日待は日即ち太陽に関連するものとし、日の出を待つ。月待は月の出るのを待つて、これを拝み解散するという。

竹野町では、今回の調査ではあまり特色ある行事は見当らなかつたが、日待については、前記したが、三原では、十四日の夜神送りのどんど立てが終わり、晩当番の家で明け方まで飲食し日待を行ない、十五日に神送りをした（前出書）。これあたりは、十五日正月を迎える前夜のこもりの性格を示したよい例だと思える。兩界院『山内年中行事』によると、七日は羽入、十日は阿金谷で日待を行なっている。羽入の例を示すと、総代（宿）の家に行き、「日待ハ幣一本先方ニテ切り、戸数ニ合セテ札（日待の札）ヲ持チ行、先ツ夜ノ折禱了レバ、当夜法話等ヲシテ泊リ、正二夜ノ明ケントスル頃ニ、祈念シ誦経了リテ、坐敷口ニ出テ、東二向ヒ、錫杖・心経及真言等ヲ誦スベシ、了テ皆々神酒・洗米・供物ヲ頂キ、散会スルナリ」とある。これは、寺が日待に介入した例である。この行事は笠浪幸右衛門氏によると昭和十五年位までであったという。竹野谷では真言寺院は関

与しており、同院と一山であり、同じ行事を行っていた金亀院は、昭和二十三年に、月待は廃されたが、日待は「かげ待ち」即ち、檀家が参らず、住職だけが拝み、お札を配るといふように変わった。蓮華寺・龍海寺もこのかげ待が一部残っているようである。

月は異なるが、中村では三月十日に日待をしている。これは明治二十五年ごろ道場（御堂）が焼けたのを契機に、各戸から一人、会館に集まる（もとは区長宅）。火伏せのためのもので、昭和三十九年ごろまでは、二人が組み、三〇分乃至一時間ごとにひょうし木を叩き火の用心に回った。もとは朝方までやったが、終戦後は午後一二時ころまでとなった。これは日待の「日」を「火」に転換して信じたものである。

日待については、十七・二十三の両待があった。芦谷では「十七夜待」があり、戸主が集まり、各神社当番・各講代参がくじ引きできめられる。また宮当番の交替の日でもある。翌十八日は、火伏せの神である秋葉講の代参の「神揚講」の日である。丹後久美浜町丸山の秋葉講社に参った代参者が帰り、一同が集まり、お札を受ける（『前出書』）。この行事は今日でも行なわれている。「十七夜待」というのは、明らかに月待の行事であり、十八日の行事に対するこもりであった。それが、このように形を変えて残っている。草飼では、十七日・二十三日に日待を行なったとあるが、これは日の上からいえば月待に当たる。十七日は、当番五名が、各家から米三合・醤油一合・大根など野菜を集め、お寺（少林寺）で豆腐飯とケンチャンをつくり、村中の戸主が集まり、夕食をいただき午後十時頃まで世間話をした。二十三日にも、寺に集まるが、こうした食事などはなく、「旧曆二十三夜は出て夜半」といふ言葉のように、月の出る夜中ごろまでいた（『前出書』）。

羽入では、寺に集まり、前記と同じ文句があり、花札などをし、餅をつき、夜食も出た。そして夜半かみさ

ん(月)を東の障子を明けて拜んで解散した。この行事も昭和十五年ごろまで行なわれた(笠浪幸右衛門氏談)。前出『山内年中行事』によると、廿三日の項に次のようにある。「当日ハ廿三夜ナレバ、村ノ総代ヨリ料理物ヲ上ゲル様頼ミ置キ、尚出入ノ女房ヲ頼ミ置キ、餅米七升ヲ洗フ、朝餅ヲ搗、檀家一戸ニ付、三ツ宛ツ(ツ)ノ割ニ御供ヲ取り、尚、夜食ニ六ツ宛ツ(ツ)ノ割ト、外ニ廿三夜米ノ(タメ)ニ壹ツ宛ツ(ツ)ノ割リヲ以テ取ルベシ、御供ト洗米、御札ト紙ニ包ミ置キ、上ラザル家へハ、寺ヨリ翌日配ルナリ(中略)、当夜ノ馳走ハ、豆フ十丁程ト、酒三升取り置キ(ケンチャン)(トウフ汁)(ゼンマイノ白アイ)ニテ、先ツ椀ノ蓋ニ二ツ酒ヲ出シ、后トハ飯ナリ、夜食ニハ、赤豆・雑煮ニテ、壺人一パイニ餅六ツ入レルノミナリ、当夜ハ、不動法ヲ修シ、正二月ノ出テントスルトキ、読経スル事日待ノ朝ノ如シ、右了テ、皆々神酒、洗米ヲ頂キ、豫テ包ミ供へアル御供、御札(月天と思われる梵字眞言がある)ヲ一ツ宛ツ持チテ帰ル、但シ陰待ノ分ハ、翌日配附スルナリ」と。

はつたい正月(二十日)と

しまい正月(二十五日)

正月二十日を二十日正月、同二十五日をしまい正月といい、正月行事は月末までつづく。特に二十日正月は、西日本では骨正月・骨おろしなどといい、東日本では棚

探しという。正月の御馳走を食べ終わる。また中国地方では麦正月・とろろ正月といい、京都府下では「はつたい正月」という。はつたい(くず玄米をいって粉にし、煮立った湯をかけ箸でねって食べる)といい、麦・とろろといい、正月の神祭りの終わりの節目とし、わざと粗末な神供を供えて祝ったのではないかといわれる

(『民俗学』
辞典)

芦谷・安谷家では、同日を「はつたい」といい、はつたいを引き、こんにやくとあげの白あえをし、村の老婦

を主客としてまねいた。老婦がいなければ、主婦が代わって出席した（『前出書』）。これは、同家は京都府とも婚姻関係があり、そちらからの移入があったのかとも思える。金原では、二十五日を初天神といい、天神さんの軸をかけ、床に祀っていたおかがみ三膳のうち、二膳は四日の「おかがみならし」におろす（前記）。一膳は同日までそのまま供えておき、同日の祭が終わって下げる。これには、しまい正月の性格が窺える。天神の祭日は二十五日であるので、後にこの信仰が結びついたものと思える。たんに天神さんの祀り日であれば、何故おかがみを当日まで残しておくかの説明がつかない。

第三節 春から夏の行事

(1) 二月行事

節分 立春の前日、大寒の終わりの日で、次の春の節に入る日。こうしたところから、単なる「節替（二月三日）」ではなく、新しい年を迎えるという傾向もあり、年占、魔除け的性格も強い。なお、正月行事との混同もあり、豆まきの様に、もと大晦日に行なわれた行事が、室町時代になると一般でも節分に多く



写155 25日天神さんの日まで残されたお鏡

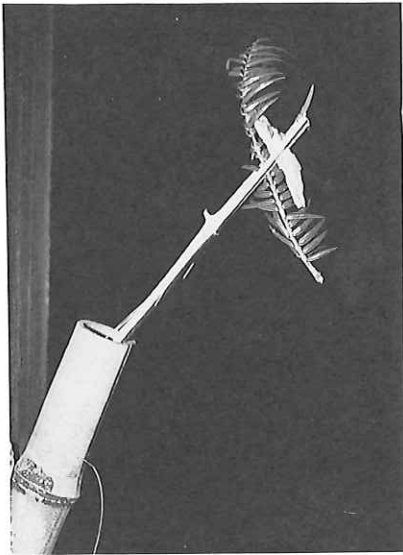
行なわれるようになった（『民俗学』
辞典）。

全般について 正月と同じように門松・しめかざり・おかがみを小ぶりながらかざる。餅花も多くが行なっている。食べ物としては、かぼちゃをこの日に食べる所が多く、金原では「なんきんの食べおさめ」という。

正月のようにどんどをたく所もある。小丸では、前日、子供達が主体となり各戸から藁を持ちより、村境のどんど場でどんどを立てをする。夕方五時半ころ（一のくらみカ）、神主当番により点火され、迎えどんどをたく。この時、しんに青竹が組まれているが、鬼の目つきに使う竹を必要な数だけ神主当番に切ってもらい、その先を割り、じゃこ・ひいらぎの葉をはさんで、戸口にさす。またかまどのある時代には、火のついた木の枝を持って帰り、その火でものを炊いた。なお、翌四日の夕方（昔は朝であったとも）送りどんどをたいた。下村で

も、大正十年ごろまでは節分の日の晩、子供達が各戸から藁を集めて小どんどを立て、送りどんどをたいた。小丸の場合、この両どんどが現行され、なお、鬼の目つきにその竹を使う、火を家に迎えたというのは貴重な例だと思える。

羽入では、朝宮参り（新宮神社）をするが、終わって、七鳥居参りをする。特に厄年の時には厳重にした。芦谷では、翌立春には、「迎え餅」をいただき、その翌日「花下し」といい、節分の花・



写156 どんどの竹をじくにした
鬼の目つき（小丸）

かざりをおろし、しめは燃やすか浄所におさめる（『前出書』）。

鬼の目つき 一般に「鬼の目つき」というが、芦谷では「鬼の目ざし」という。長さは一五、六センチほどのが多い。

ひいらぎ―竹の先を割りはさむ（田久日・宇日・芦谷） ひいらぎ・じゃこ―竹の先を割りはさむ（切浜・

中町・小丸） かや―竹の先を割りはさむ（羽入） かや―（金原） かや―おがらの先にさす（床瀬）

かや―じゃこ―おがらの先にさす（下村）

右のような傾向で、竹野町中部から浜にかけてはひいらぎを竹にはさむ。これにじゃこが加わる。中部から南にかけてはかやをおがらにさすのが多い。この中で、羽入・笠浪幸右衛門家では、じゃこをいろり（現在はころろ）にいぶし、そのけむりに合わせてから豆まきが終わった後戸口などに指す。もとはこれで、後にじゃこと一緒に痛い葉をしているので、鬼の目つきには適当かと思える。金原のかやだけ、また中町では蔵に鬼の目つき（ひいらぎ・じゃこ竹串）を正月と節分に同じようにさすこと、また但馬の山間部（村岡・養父・大屋各町）などはかやを門松にたてるので、門松的要素もあつたと思える。いずれにせよ、邪気などを払うのが主な目的のものである。

虫の口封じと豆まき 一のくらみに戸主は、豆をますの中に入れ、豆をまき鬼を追い出す。豆は一般に大豆が多いが、黒豆を使うところもある。下村の乳原まきのように、同じ地区でも、他の家はこれを行なうのに、行なわない家もある。これは「鬼の家」といわれる、かつては修験者の末えいと考えられる。香住町森の旧鬼木



写157 虫の口封じ (羽入笠浪幸右衛門家)

家、同隼人の西村家などは、昔、戸主が正装し、さんだわらに御幣をたてて村の辻まで神迎えに行く。床の間に招じ入れ、これを床にまつり、あいさつし、風呂呂に入れ、ご馳走した。旧鬼木家は、鎮守吉野神社を奉じて来、定着したというから、修験者の末えいである。勿論、豆まきはしなかったという。

本町では、今回の調査では、この例は見聞しなかった。ただ、芦谷・安谷家では、盆の仏迎えに同類のことを行なっている。八月十三日暮方、家族は線香を持ち、どんど場の上まで行き、鐘を打ち家に帰る。仏壇に線香を立て、次に風呂場にも立てる。これを「仏迎え」と「湯殿案内」という（前出書）。これは現行されているが、この意味からいうと貴重である。同家もかつて宗教者系の家であった。

豆まきの前に、毒虫の口封じを行なう。羽入・笠浪幸右衛門家では、現在も行なっている。同家では黒豆をまくが、昔はいろり、現在ではこんろを同場所に置き、ほうろくで黒豆をいりながら、鬼の目つき（つげの木）の残った葉を、一つずつ焼く。「まむしの口、へーびの口、はーちの口、だーにの口」と唱えながら、悪い虫の口を封じる。この例は、切浜・芦谷・床瀬（虫を殺す）という）などでもあった。切浜では「のーみの口をやきましよう」など、芦谷では「まむしの目をやいてやりましよう」（同地では「毒虫の目を焼く」という）と、文句は少し異

なるが行なう。現在でも少数が行なっているという。邪悪なものを払う行事の一つである。

豆まきは、現在でも広く行なわれている。大体パターンは同じで、奥座敷から、福は内、鬼は外と叫びながらまき、最後に、外に向かい鬼は外といひ戸口をしめる。この時、厳重な地区では、田久日・芦谷のように、家の明かりを消して行なっている。また芦谷・金原のように、この夜、子供達が豆をもらって歩いた例も少ない。芦谷・安谷家では、一のくらみに兩戸をしめ、主人が表座敷から、「福は内福は内、鬼は外」と大声でまく。最後に声を一段あげ「鬼は外」といふ。昔は近所の子が豆を拾いに来た。豆はほうきでは集めない。手で拾う。各建物で行ない、最後に入口の戸を閉し、鬼の目ざしをさす。すんだら一升枧に入れたまま神前に供える。

草飼では、夕方子供達は袋をもち、家々を回り、「福豆くんなせ」といひ、蚕豆そらまめのいったのを一握りずつもらった（『前出書』）。羽入では、いった豆を、豆まきの前に神前に、あわびの貝を器とし、三つぶずつ神前・床などに供える。金原では神棚に供えるが、初雷の時食べると雷に当らぬという。

その他豆にかかわる行事 (ア)豆を年の数だけ食べる。(イ)豆を辻に捨てる。(ウ)月占をするの三つがある。

(ア)では、年の数だけというのが殆どであるが、切浜では、一つ多くといひ、床瀬では別に数は定めておらず、少量という。老人の場合、全部いただくのは無理なので、例えば六十八歳の場合は、六プラス八で一四個食べる。芦谷では、一口にほうばって食べるという（『前出書』）。

(イ)については、自分の年の数だけを半紙に包み、一文銭を入れ、身をさすり特に悪いところがあったら丁寧にさすって、辻に捨てる。切浜では(ア)と同じく年にプラス一つの数、床瀬では一つかみほどという。悪いもの、

厄をすてるという気持ちがある。この時後をふりむかず走って帰るといふ（田久日・草飼）。羽入・笠浪幸右衛門家では、この時、家族全員の分の豆を一つにして紙に匂み、一円（一文銭）を入れ、各人がこれを頂き、後に放る動作をなし、終わって各人の体をさすり、道の辻にすてる。これは現行しているが、いろいろのあつた時代には、なべとりなども一緒に送った。このなべとりをすてることは二〇年位前までは広く行なわれていた。

(ウ)では、いろいろに一二箇の豆（大豆が多い）を並べ、白くやけると晴、黒くこげると雨というように月占を行なった。宇日では大正のはじめまで、切浜でも昭和二十年ごろまで、床瀬では同三十年代ごろまで行なっていた。

その他 切浜では、田畑の「むぐらもち送り」をした。「送った送ったむくろもち送った。丹後のはてに行け、丹後のはてに行け、丹後のはてに行け」といったというが、子供の行事で、狐狩りと同じ系統のものかと思える。また節分の成り木ぜめがあつた。正月七日に下村などで行なわれたと同じ内容である。これらを正月行事の移行か、また節分本来のものであつたか疑問が残る（宮崎熊五郎「ふるさとの昔話」（年書）民話・民話・屋号しらすべ 万）。

涅槃会 仏教の始祖釈迦の入滅の日。その遺徳をしたうたために行なわれる。特にその入滅をかなしみ弟（二月十五日）子以下動物までの五二類がなげき悲しんでいる「涅槃図」は、日本独自で発展した面がある。

各寺院の同図が特に大きいのは、昔は僧侶が檀家に、これで絵解きとして説明したためと思われる。それと、涅槃に雪の降りじまいという言葉があるように、春の農耕がそろそろはじまる時でもあり、その信仰とも結びついた。特にこの日のお供を「はなくそ団子」というが、これはもと「花供御」の転化したものである。この「花供御」は、竹などに餅・あらねなどの御供物を結びつけて供えたことから呼ばれた。この中にはその年の

農作を祈る意味もふくまれている。

竹野町の場合、あまり特色はない。羽入では、寺に参り、「はなくそ団子」をいただいた。当日、これを本堂でまいたが、子供達は喜んで拾っていた（昭和初年ごろまで）。芦谷の安谷家では、個人で、涅槃図を床にかけ、菓子・くだ物を供える。下村では、公会堂に軸をかけ、涅槃講をした（五〇年位前まで）。現在でも祀るが供え物（菓子など）は「山菓子」といって、各戸がいただいている。寺でもなく、個人、または地区民が自主的に祀っている例である。

羽入地区では両界院蔵『山内年中行事』の十四日の項に、「涅槃會、当日迄二白米一升ヲ粉ニシテ置クベシ、之レ当日（ダンゴ）二用スル也。（中略）扱テ当夜ハ三ヶ村ノ老人共參詣シテ通夜ヲスル故、当番（の寺）ヨリハ、煮シメ壺折ト、赤豆飯ノ結び（米三斗ヲ以テスル）、茶水（中略）、非当番ノ寺ヨリハ、煮シメ、茶水（中略）等ヲ出ス。当番（の寺）ヨリハ、読経ハ勿論説教ヲナス例ナリ」。十五日の項に法要の後「了テ、參詣ノ子供衆ニ、供物ノ（白ダンゴ）投ズ、之レハ總代ノ役ニ頼ムベシ」とある。前記羽入（笠浪幸右衛門氏談）の箇所、昭和初年まで、「はなくそ団子」まきがあったというのは、この記述によると「白ダンゴ」とある。よく五色の色を塗ったのが用いられるが、同寺ではこれは使っていない。また講があり、通夜・夜食もしている。これに下村の例も同様であった。

初 午

実際は、一月遅れの三月に行なわれた。その事情及び行事を芦谷安谷重行氏（故人）

（二月はじめの午の日）

は『安谷家伝記第二』に、「昔は旧二月であった。明治四十年ごろ、二月（新暦）と

したが、雪のため稲荷社の清掃が出来なかつたので、三月とした。御神体は明治四十二年京都伏見稲荷社から

勸請した。末広稲荷を合祠。養蚕の盛んな頃には同組合が神酒一本をあげた。小豆御飯（御にぎりでも）・油揚（四つに切る）を内・外殿に供える。別にお使者（狐）の出入する穴が鉄道路側にあつたが、そこにも供える。昼はおはぎを供える」（以上趣意）。

中村でも狐塚に「まゆだんご」を供えた。三原でも養蚕の盛んだったころ、稲荷さんを祀った。米の粉で「まゆ玉」を作り同社に供えたが、各戸に子供がもらいに回った（『前出書』）。以上、竹野町では、三月になつたのは、気候の関係であつた。これは、以下各行事が一月遅れで現在でも行なわれているので参考になる。実際の気候にあわないと行事は出来ないのである。この意味で旧暦の方が実情にあつていた。

二月初午の日に、稲荷祭りをするようになったのは、京都伏見稲荷社の影響である。同社の祭日であり、この日に祭神がお山に降臨したといわれている。また同社はお使いを狐様とする。以上で、特に養蚕が盛んであつたころ、この祭は盛んに行なわれた。伏見社の狐の信仰から実際の狐がいる所にお供えをしている。まゆ玉団子は、かいこのまゆに形が似ているから供えられたものであろうか。

春の亥の子

亥の子の祭は秋の中心である。十月の亥の日の祭はもと中国で行なわれていたのが、日本に入ったといわれる。特に農村では田の神の信仰に結びつき、秋のは収穫祭となつた。

（二月の猪の日）

この日、田の神が田から上ると信じられている。もともと春には山の神が田におりて来、田の神となり稲を守り、秋には役目を終え、また田から上り、山に帰ると信じられている。この立場から、自然に春の亥の子の祭も生まれた。秋ほど盛んではないが、兵庫県や島根県の一部にあるといわれる（『民俗学』）。

竹野町の今回の調査でも、次の一例があつた。阿金谷で昔、三月（旧二月）の亥の日に、田植えの世話にな

る家に、ぼた餅を配った（金原・右近三右衛門氏談）。わずかではあるが、竹野町でも行なわれていたのである。

彼岸

春分を中心にし前後一週間。春分の日は、昼夜の時間が同じで、太陽もま東から出、ま西

（二月春分が中心）

に入る。「暑いも寒いも彼岸まで」という言葉があるように、いよいよ春の季候となり、

農作業に入る。こうしたところから、先ず太陽に対する信仰行事がある。但馬でも、村岡あたりでは「日の伴」といい、一日太陽を追うて歩き回る行事があった。「彼岸」は、現在では仏教の教えの上から、この迷った世界を「此岸」というのに対し、さどりの世界「彼岸」をさすと説明する。しかし、もとは民俗的な信仰の目であり、太陽に対する念仏行事の「日天願」から「ひがん」が出たのではないかという説もある。農耕儀礼には日本人は必ず先祖祭をする。この点から、先祖供養の時とされるようになった。これには僧侶の関与が大きく、筆者（日野西）は、前後一週間となったのは、僧侶（寺）の行事からそうだったのではないかと考えている。

竹野の彼岸行事には、大した特色はない。丁寧な所（家）では、入り・中日・明きに、墓参りをする。大ていは、中日だけ寺参りと墓参りを行なう。供物は、団子（きなこまたは小豆あんをつける）、その他ぼた餅が多い。寺参りには米一升を持って参る例が多い。前出『山内年中行事』をみると、中日に檀家が参って来ると、豆腐でけんちゃんをつくり、味噌汁・御飯（白力）を出す。食事が終わって、三帰・十善戒を授け、説教をする。女房衆も参って来るが、西国三十三番御詠歌をあげ、後で田久日から供えられた海苔で、海苔御飯をつくり、漬物を添えて出すとあるが、これは現在でも行なわれている。下村では、大岡山にある大岡寺（真言）に参った（昭和二十年以後はない）。これはこの周辺の地区の行事だったと思えるが、農耕儀礼に関係ある山祭りの性格があるかと思える。

(2) 三月行事

三月祈禱

三月は、農事のはじまる大切な時期であった。それで物忌やみそぎが行なわれた。三日のひなまつりにしても、もとはかざる人形は、人のけがれを流すための「人形」^{ひとがた}であった。一方、磯遊びや山遊びがあり、いずれも神事にかかわりがあり、特に磯遊びは、みそぎに基づくものと考えられている。

羽入観音寺では、三月はじめに「三月祈禱」といい、田久日では、住職は観音堂で護摩供養法を行なう。その行法中に、壇に祀っていた御幣(板札が結びつけてある)を適当な人(僧、法類も呼んでいる)が持ち地区の入口・諸神社で錫杖・心経などをあげてお祓して回り、両入口には板札つきの御幣、各神社(小社をふくむ)には普通の御幣を奉納する。板札の二枚には、普通の御幣を奉納する。板札の二枚には、「種子、奉修不動明王護摩法供村内安全祈攸」とある。別にもう一枚あり、「院(両界院)から地区に入る口」(船で送り迎えるので海岸部であろうか)に立てるが「種子 奉修不動明王護摩秘法供村内安全漁業繁昌祈(攸)」と書く。これを見ると明らかに地区の安全と漁業繁昌のためのものであり、村境に建てるのは、外部から邪魔などが入るのを防ぐ意味がある。そして、海岸地区で行なうのは、磯あそびに本元はあるのではなからうか。

羽入では、三月三日ころ、地区内にある祇園社に両界院住職が行き、御幣と地区中(長さ五、六〇^{トイ})を囲む長いしめを祈禱する。錫杖・般若心経・秘鍵・諸真言をあげる。終わって、地区の人は、両入口に御幣をたて、七・五・三の御幣のついたしめで、地区全体を取りまく。明らかに地区に邪悪なもの進入を防ぐ行事である(以上(『山内年』中行事))。そして、三月はじめの行事もとの姿を残している行事である。この両行事は、現在でも行なわれている。

三月節供

根本的には、前の三月祈禱と同じである。これが三月に定まったのは、中国の節目の（ひなまつり、三月三日）信仰が入ったのであり、主にひな人形を祀るが、もとはみそぎに使った「人形」ひとがたにあり、その人のつみ、けがれをこれに託して流したのである。その名残りが、鳥取県の「ひな流し」にみられる。この日菱形の餅を供えるところが多いが、これは「心臓」をかたどったといわれ、丸い形をした「おかがみ」より古い姿だといわれる。

竹野のひな祭は、一月おくれの四月に行なわれている。桃の節供ともいわれ、時期的に四月がかなうからである。芦谷・安谷家（伝記）では、女の節供といい、よもぎがないので一月遅れにする。白と青（よもぎ）の菱型餅を供える。神社・末社や家の神々にも小型のものを供える。床に軸（神号）をかけ、ひなは床の向かいに祀る。子供一人一人におひな様があり、その一つ一つに供える。花は桃・猫柳をたて、餅にも添える。神酒の口にも桃の木の枝の先をきって添える。蚕豆・あられも供える。節供花は翌日の午後には取り換えるが、節供花の立っている内に病みつくると死病になるという。ひなは早く出し、早く納めると娘の縁談が早いという。初節供、特に長女の場合には、地区の子供全部、中学生から乳幼児までを呼び、御馳走する。床には初節供のお供えを通常のとほ別にする。神社に、神酒・餅・魚の三点または五点を三方三膳にのせ、初節供の子供をともない、両親が両神社・末社に参拝する。夕食に妻の親元を主体に親戚を呼ぶ（趣意）。以上であるが、特に初節供を行ない子供組入り（長女を主体とするが）を行なっていること、ひなを早くしまうことと、子供一人一人にひなを供えるという点は、これがかつて「人形」ひとがたで、その人のつみ・けがれをはらうものであったことの名残りと思える。

以下要点をまとめる。一般に、「女の節供」とも「桃の節句」ともいわれている。ひな人形は、現在では妻の実家及び親戚から女の子が生まれると贈られるが、業者がつくった内裏びなのセットになったのは、戦後も昭和三、四十年以後のことである。同二、三十年ころは押しびなのセットがよく使われた。もとは、女の子が生まれると妻の実家を主体とし親戚から、一体を母親あたりが心をこめて作って贈ってくれた。それを並べて祀った。金原では「土びな」も使った時代もあった。前記した芦谷のように、その一つ一つにお供をしており、床瀬では、その一つ一つに娘の名がつけられていた。元来、一人一人に贈られたものである。金原では、娘の子がいなくても祀ったといい、各人の「人形」に使った名残りが認められる。祀る場所は、芦谷のように床の向かい側というのがあるが、みせの間が多く、納戸（金原の右近家）という例もある。

供え物は、菱形の餅（白と青〈芦谷・金原〉、赤と白〈宇日・床瀬〉）が多く、その他のし餅（切浜）・ぼた餅（中村）・白餅などがある。あられをいり、豆（大豆・蚕豆）をいって供えた、所謂「ひなあられ」も行なわれていた。

(3) 四月行事

卯月八日・降誕会（四月八日）

四月八日は釈迦の降誕会として、一般に知られている。寺では花御堂を立て、誕生仏を祀り、甘茶をかけて祝う。一方、農村では、「てんとう花」といい、竹の先につつじなどの花を結びつけて立てる。またさおりには、田の水口に、おおばの木の枝を立て、葉に黒豆をいったものを、洗米を包んだものを立てた。丁寧な場合には、栗の枝・すすきの新芽を添えて立てた。これらは、田の神を家や田に迎える儀礼である。たまたまそれが、四月八日の釈尊の誕生日に重なって、この日に集中したのである。ま

た百万遍の珠数繰りも行なわれた。しかし、気候の都合で、一月遅れの五月に行なわれていて、同月の項に記述されているので、そこにゆずる。ただ日野西真定の「兵庫県城崎郡竹野町を中心とする但馬地域の花祭行事の研究」(『近畿民俗』四十八号)に詳しく論じてあるので、関心ある人はこれを読んでいただきたい。

(4) 五月行事

五月の節供

五月五日をめぐる年中行事を、「五月の節供」とか「端午の節供」ともいう。近年は竹野町内でも五月五日に、男子の初節供を祝い、鯉幟や吹き流し・幟を立てる家々が増えてきたが、一月遅れの六月五日を「旧節供」と呼んで、節供を祝う家の方が多いのが現状である。芦谷では、五月幟に蓬・ススキ・菖蒲を束にして付けることになっていた(『安谷家伝記』行事、習慣篇 第貳 参照)。また、三原には、笹巻きを蒸した湯を家の周囲に撒くと、長虫(蛇など)が入らないと言ったり、蛇が身入り(体内に蛇が入ること)した時は、菖蒲湯に入ると蛇が体の外に出るといふ俗信が伝わっていた(谷垣桂蔵著『但馬の民俗』年中行事「二」参照)。節供行事の詳細は、「第六項 六月の行事(男の節供)」を参照のこと。

八日花・ 竹野地方では昭和四十年ごろまでは、四月八日に催される「卯月八日」の花祭りとテントウバ

花祭り ナ(天道花)の行事が、一月遅れの五月八日に行なわれる所も数多くあった。この日に子供た

ちは蓮華の花を摘んで、寺のお釈迦さんの御堂を飾ったり、寺で甘茶を貰って飲んだりした。現在でもお釈迦さんを祭る花祭りは、各寺院で催されているが、民間の天道花の行事はほとんど消滅してしまった。天道花とは、ウツギ・シヤクナゲ・ツツジなどの花束を竹の先端にくくり付け、家の庭先に立てる習俗をいい、第二次世界大戦前までは全国的に見られた。この行事は「八日花」「夏花」「立て花」とも、別称される。

〔床瀬〕 竹の先にシヤクナゲ・ショウブをくくりつけ、門口に立てる。屋根突きといつてそれらを草屋根に投げてさす（神戸新聞学芸部著「民俗」探検 民俗編より引用）。〔床瀬・門谷〕 山ツツジ・藤などの花を風呂に浮かべて入浴した。このような風呂を「花湯」と呼んだ。花湯に入れば、疫病にかからないと信じられた（谷垣桂藏著「恒馬の民俗」年 中行事二 参照）。〔芦谷〕 昭和四十七年ごろまでは、五月八日にテントウバナ（天道花）や花祭りの行事を行なう家も多く存在した。なかでも安谷家は古風を守って行事を行なっていた様子で、先代当主が昭和四十七年に記録した『安谷家伝記 行事習慣篇 第貳』のなかに、次のように記されている。

一、五月八日花まつり 釈迦如来御降誕ヲ祝フ 長五米位ノ竹ノ先端ニ花三種位ヲ挿シ込シテ 庭ノ口ノ石灯籠ノ辺ニ立テル（略）

一、五月八日ノ朝ハ主人ヲ初メトシテ 皆庭ニ出テ水ヲ汲ンテオ供ヘヲシ中ニ入り仏壇オ床等ニオ線香ヲ上ケテ 拝礼ヲスルコト、庭ニモ線香ヲ上ケルコト、

とある。この記載より五月八日は祖先の霊を祀る日とも考えられ、竹竿に挿した花束を祖霊が依り付く神籬として、丁寧に祭祀したことが明らかになる。安谷家では平成二年に至っても、前記の資料のように五月八日の午前中になると、約三、四口の真竹の先端にツツジの束をくくり付けて、この竹竿を庭木に固定して立てる。庭の石にお釈迦さんの像を安置し、砂糖水（以前は甘茶）をかけてお祭りをしている。竹竿は保管しておいて、次年度も使用する。

〔羽入〕 昭和四十年ごろまでは「八日花（天道花）」と言って、竹竿の先端部に山ツツジ・ウツギ・石楠花などの花束をくくりつけて、家の庭先に立てた。竹竿の根本部分に団子を供えた。団子を供える行為は、天道花

が神の依り代の役割りを果たしていることを物語っている。「竹野」甘茶に作物の種を浸けておくと、虫が付かないという(谷垣桂藏著『俚馬の民俗』(中行事)より引用)。

数珠繰り

松本では、五月に老人たちが中心になって「百万遍念仏」を唱えた。この行事を「数珠繰り」とも呼び、大勢の人々が輪になって、念仏を唱えながら大数珠をまわした。数珠繰りが終了すると、竹の子を煮て食べた。この行事は、現在も五月八日に行なわれている。

サオリ

門谷では五月卯の日を「サオリ」といい、米と大豆を炒って、苗代の田の神に供えた。苗代をしてから三十三日目に苗代に入ると崇るといだが、これを過ぎてから入ると大丈夫だといった。田植えのおりに初めて採った苗を、「カミサン(神さん)苗」といった。この苗を二つ取ってきて、神棚にあげ、小豆御飯を供えた。正月の縫いぞめの米はカンブクロ破りと言つてこの日に炊いた(国学院大学民俗学研究会編『民俗探訪』(宮崎県白幡郡西郷村・兵庫県城崎郡竹野町引用)より)。

(5) 六月行事

氷の一日・ 六月一日は「氷の朔日」と別称され、古くは宮中で氷室の水を群臣に賜る「氷室の節会」の行事が催された。江戸時代では「氷室の節供」といつて寒の入りに作ったかき餅とか、摂津の勝

氷餅

尾、または富士山などから出る氷餅を食べて祝う風があった。ただし、民間では氷を口にすることができないので、正月に供えた餅花の餅を炒つたり、囲炉裏の上方の「アマダ」に吊るしておいた鏡餅を細かく割つて食べた。これを「氷餅」と呼んだ。一方では、この日に鏡餅を食べることを、「歯固め」と称する所もある。

〔中村〕 囲炉裏の上部に当たる家で一番高い所に、堅い餅を吊り下げておいた。六月一日に、この餅を降ろし

て食べた。〔三原〕正月の餅搗きの最後に、未婚の男性を年男にして「千石万石おめでとう」と唱えながら、鏡餅を搗かせた。元旦の朝、起きるとすぐに、鏡餅・カヤの実・勝栗・豆・昆布を半紙で包み、家の「タカウラ（天井裏）」にぶら下げた。六月一日の朝に、タカウラに吊り下げておいた鏡餅を床板の上に落として、細かく割った。この餅を「氷餅」と呼んだ。氷餅を食べると夏に水当たりしないと信じられた（『兵庫探検』
俗編、参照、民）。〔門谷〕囲炉裏の上に竹の簀の子を設置した場所があり、ここを「アマダ」と呼んだ。ここに鏡餅を吊るしておき、六月一日に餅を降ろして食べた。この餅を「氷餅」と言った。氷餅は薄茶色に変色していた。アマダに鏡餅を吊るしてあったことから、正月から六月一日までは「年頭に行ける。」といった。〔林〕ドンドの火であぶった鏡もちを紙に包んで天井裏に吊っておき、六月一日に「コオリモチ」といつて食べる。コオリモチのある間は正月のあいさつをしてもよい、とされている。これを食べると歯が丈夫になるといふ（『兵庫探検』
俗編より引用）。〔河内〕餅搗きの最後に直径十センチぐらいの餅をとり、紙に包んで囲炉裏の上部の「アマダ」の端に掛けて置いた。この餅を「氷餅」と呼び、六月一日に降ろして、餅網の上で焼いて食べた。〔金原〕正月餅を紙に包んで、台所の竈の上に吊るした。この餅を「氷餅」と呼んだ。六月一日に氷餅を降ろして家族で食べると、魔除けになるといった。〔下塚〕六月一日に「氷餅」を降ろして食べた。

男の節供

〔三原〕シヨウブ・ススキ・ヨモギを二、三本ずつワラで束ね、屋根ふきのまねをしたり、屋根のひさしや葺に一本ずつさす。楠公や大閻さんの絵を描いた一反ののぼりを立てる（『兵庫探検』
俗編より引用）。〔桑野本〕「シヨウブ田植え」といい、ススキ・ヨモギ・シヨウブなどで屋根をふく。また神ダナ、牛の Мая口、ウマヤの口にもさす。女の人は「シヨウブ髪」といい、髪を解いてシヨウブをつけるとよいという

(「兵庫探検」
俗稱より引用)

〔林〕六月五日には、笹やサルカケイバラ(サンキライ)の葉で団子を包み、菖蒲の葉と一緒に蒸して食べた。お神酒スズに菖蒲を挿して神棚に供え、神棚からお神酒を降ろすと、男性より先に菖蒲酒をいただくことになっていた。この日だけ、女性が一番に酒を飲むことができた。〔竹野〕蓬と菖蒲と茅を束ねて、根本の方が上になるように、民家の屋根の庇や船の屋根部分に投げ上げた。この日には、湯に菖蒲を入れて風呂に入ったり、頭が硬くなるようにと菖蒲で頭部を縛ったりした。菖蒲を頭に巻くことを、「兜」と呼んだ。梗米と餅米を混ぜて粉に挽いたものを水で練って、「小僧主」と俗称されるサンキライや柏・鬼笹の葉で包み、菖蒲を敷いた蒸籠で蒸す。鬼笹で包んだ団子を「笹餅」といった。〔浜須井〕菖蒲と蓬・茅を束にし、屋根の上に投げ上げた。菖蒲を採って来て、家の中の柱にくくり付けた。

箸納め

田久日では、全戸を上組と下組に分けて、二組が交代で宮当番を務めることになっている。浜側の家々が下組で、谷側の家々が上組であり、毎年六月に当番を交代する。六月十一日に若者が集合して会食をする。このとき使用した箸を半紙で包み、新藁で箸を梯子状に組み、氏神境内の木の枝に吊るす。この行事を「箸納め」とか「講」と呼ぶ。

なお、『但馬海岸』(兵庫県教育委員文化課編)には、「同部落では、六月十一日に神主当番の二人が伊勢参りをして帰ってくる。これは伊勢講の代参であるが、竹野町鷹野神社に行き「ひたたれ」をつけてもらい神主から神に仕える資格が与えられるが、これを迎えて「ドウムカエ」を行なう。村が上下に分かれお膳を持って宿に集まるが、この時、各自新しい箸を作って行く。お講が終わると、当番の二人が稲藁と半紙で箸を四つに分けて包み、上は×印、下方は＝の形にして組んであみ、境内の木に掛ける。一年を無事に過ごさせて頂くようにと祈って行

うのだという。」と記録されている。

サノボリ 田植えの終わりに行なわれる田の神を送る祭りを「サノボリ」「サナボリ」「サナブリ」「サナブリ」(サナボリ) ミテ」などと呼ぶ。昭和二十年ごろまでは全国的に分布していた田の神送りは、それぞれの地方によって名称が多少相違していたのである。

〔田久日〕昭和四十六年ごろまでは、サナボリ餅を搗き、手間ガエ(借り)をした家に配り、サナボリを祝った。〔西町〕田植えをして余った苗を、直径三センチくらいに束ねて、神棚に供えた。空豆御飯を炊いて神棚に供え、豊作を願った。〔浜須井〕田植え休みを「サナボリ」と呼んだ。女性は着物を洗濯したり、家のなかの掃除をしたりした。餅を搗き小豆餡をつけて、「牡丹餅」を作り、近所に配った。

その他 ハナマツリ 六月十一日に竹野の大浜さん(神官)が、田久日に来て、氏神さんで祈禱する。この行事をハナマツリという(『但馬海』岸参照)。

伊勢講 田久日では上一人、下一人が籤引きで、お伊勢さんに代参した。伊勢から帰ってくると、「ドウムカエ(道迎え)」といって当番の家で、ごちそうをだして、代参の二人を慰労した(『但馬海』岸参照)。

不動尊の祭り 芦谷の不動尊の宵祭りは六月二十七日で、本祭りは翌二十八日であった。不動祭りには、小豆餡をまぶした餡餅や豆のオヒタシ・野菜の煮物などを作った。

四十八夜念仏 奥竹野では、旧六月二日から七月十八日迄、若い衆は四十八夜の念仏といって、堂で鉦を叩き阿弥陀さんをまつりお経を二くり(二つのこと)あげた(『国学院大学民俗学研究会編『民俗探訪―宮崎県白』(竹野西郷村・兵庫県城崎郡竹野町)より引用)。

(6) 七月行事

田 祈 禱

半夏生（普通は七月二日）の日に、羽入の荊木山では、稲の豊作を祈って「田祈禱」が行なわれる。当番寺の持仏で、金亀院・両界院の住職が護摩を修し、檀家五地区（羽入・阿金谷・松本・宇日・田久日）の区長が参詣する。御祈禱が終わると、全員で会食をする。食事がすむと、各区長は御祈禱札と護摩の灰を受けて地区に持ち帰る。御札は二日ほどの笹つきの竹に挟んで田の畦や水口に立てる。

はんげ

（半夏）祭り

二連原では七月二日に、秋葉社の祭りをする。この祭りを半夏祭りとも別称する。午前中に秋葉社に参詣して赤飯を供え、午後からは地区をあげて休みとなる。

川すそ祭り

（祇園祭り）

〔中村・下村〕七月十三日が宵宮で、翌十四日が祇園祭りの祭礼である。昔は、地区全員が仕事を休んで祇園社に参詣したが、今日では掃除をするだけに変化した。

〔三原〕七月中に「川ソソさん」を祭る日がある。この日は川にはいると、カッパにひかれるといつて、川へはいるのを禁じている。川ソソさんは氏神さんに合祀しているが、それ以前は下の川べに川ソソさんの厨子があつた（『兵庫探検』俗編より引用）。

〔竹野〕以前は、七月六日が竹野の「川すそ祭り」の日で、この日を「浴衣初め」といって初めて浴衣を着て、浜におさまった神輿の所（御旅所）へ参拝に行った。川すそ祭りのおりに「しもの病氣（婦人病）」の平癒を祈願すれば靈験あらたかとされ、婦人たちは神輿の後について歩いたり、浜に安置された神輿の周囲を裸足で歩いた。神輿の前で観音経を唱える婦人や、砂の中に下半身を埋めた婦人が数多く見受けられた。川すそ祭りの日には、海に入つてはいけなさとされた。祭りの御馳走は赤飯と昆布巻き・焼き豆腐・高野豆腐・蒲鉾など

の煮物であった。川すそ祭りは龍海寺の管轄で施行され、神輿も同寺で保管されている。なお、『兵庫探検民俗編』に、「七月六日から十四日までが祇園祭りで、ゆかた祭りともいう。戻り祇園と呼ぶ十四日まで、氏は仕事を休んで毎日お参りをする。豊岡市内の祇園講を持つ部落からも団体でお参りに来、お守り札を受けて帰る。キュウリをお供えする風習がある。」と記されている。このようにキュウリを供える由縁は、京都の祇園社の紋がキュウリの切り口に似た五葉木瓜紋であることに起因する。

このほかに『但馬の民俗 年中行事』(二)のなかにも、「竹野町竹野浜の川すそ様は、大国大神を祀り〔川が海に注ぐ所、河口に祀るものである〕という。竹野町には次のような昔話がある。川すその神様は、いつもカワコ(河童)を放しているから、この日に川遊びをすると、カワコがお尻からハラワタを抜く、という。

カワコは指が二本で、爪はカギ(鉤)のように強い。(後略)」とあり、河童が川の神の使役神とする昔話が竹野の祇園祭りに付随していたことがわかる。古来、河童も水神の化身とされて、同類の伝説が全国各地で語り伝えられている。これらの伝承から川すそ祭り・祇園祭りは、水神を祭祀する「川祭り」でもあると考えられる。水神も疫神も凄まじい祟りを顕す御霊神であり、原始的な神観念においては同質である(大森恵子稿「疫神送りの諸形態」特に、民間芸能を中心に「大鼓踊り」)

「まつり」四十号所収、大森恵子稿「風流大念仏雨乞いと風流」。

その後、還幸祭にあたる七月三十日の川すそ祭りの方が賑やかになったとおもわれる。この日には、榊の木に天狗面を吊るし、これを神籬として神輿とともに巡行した。神輿が荒々しくぶつかり合ったので、「喧嘩祭り」とも呼ばれた。七月三十日の川すそ祭りの詳細は、「祭礼」の節を参照のこと。

〔浜須井〕七月十三日の夜に、村中で奥須井の八坂神社まで参詣した。神社の境内で宮当番が、一晚中焚き火

を焚いた。

蛸薬師 鬼神谷では七月七日を「薬師さんの祭り」と呼び、疣取りに御利益のある「蛸薬師」の縁日とする。昭和十五年ごろまでは薬師祭りには親戚を招待して、砂糖餅（あんころ餅）を搗いて出した。鬼神谷の蛸薬師は古来、「疣を取ってくれたら、蛸の絵を書いて来ますから」と薬師如来に祈願すれば、かならず疣が取れると信じられてきた。薬師堂内には祈願成就の御札に奉納された蛸の絵が、幾枚も貼られている。

目の薬師 七月十二日は、東町の興長寺に安置される薬師如来の縁日である。この薬師はもとは海に近いの縁日 「イモゴ谷」の中央部にまつられていた。薬師堂の付近から清水が湧き出ていて、この水で目を洗うと眼病が平癒すると伝えられ、近在から多くの人々が参詣した。その後、薬師堂は現在地に移転されたが、眼病平癒祈願をする参詣者は跡を絶たず、薬師如来に供えた水やお茶で目を洗う習俗が残存していた。

七月のその 四十八夜念仏 金原では昭和十年ごろまで、七月一日から八月十八日まで毎夜、青年団が中心になって観音堂に集合し、四十八夜念仏を唱えた。特に、七月二十四日を「中回向」といい、御馳走を作って食べた。

観音さんの縁日 二連原では七月十七日に地区の人々が会館に集合し、観音像に御詠歌をあげた。

妙見さんの縁日 七月十八日になると毎年、東町の龍海寺境内に祭祀される「妙見さん（社）」へお参りをした。虫送り 床瀬では、稲に虫がつくころ、二、三人が組んで虫送りをする。石油かんなどをたたき、竹ボラをならし「ぬか虫送った、丹後の方へ行け行け」と田のまわりをまわる（兵庫探検 俗稱より引用）。

焼祈禱の行事 草飼は大正九年七月二十一日に大火があり、区の半分の家々が焼失したという。それ以後、その日を祈禱日と定め、午後氏神の境内に区の全戸が集まり、社殿の周囲を「払え給え清め給へトーカミエミダミカコンリコンミコンダケン」と唱えながら回り、一周するたびに竹串を一本神前に供えた。各自に配付された竹串がすべてなくなつたとき、次は不動尊の所へ行って同様に「お千度」をした。不動尊の周囲を巡るときは、行者講の唱詞と一緒に「ノーマクサアマンダー」といった（花房喜代次著「遠くな」つた草飼の生活」参照）。

第四節 盆行事（八月行事）

(1) 盆の準備

釜蓋朔日

旧暦七月一日の異名で、地獄の釜の蓋が開く日といい、盆の始まりの日とされる。中村・森本・和田では八月一日に、小麦粉を水で練ってソラ豆や小豆の餡を入れて包み、たてり（ミョウガ）の葉で巻いて、鍋に油を引き二、三個並べて焼いて食べた。この団子は「鍋焼き」とか「スリ焼き」とかよばれ、森本・中村では昭和二十年ごろまで、一方の和田では明治時代末期まで作られていたという。

七日 盆

墓掃除 全国的に見られる習俗であるが、竹野町でも八月七日に墓掃除や仏壇の掃除をする家が多い。しかし、近年では同月一日・五日・十日・十一日など、都合の良い日に墓掃除をする家が増えてきた。

〔桑野本〕八月七日は「仏さんがきなる日」といって、墓を掃除した。この日に仏壇に置いてあつた仏器を、すべて川辺に持って行き焼却した。〔須谷〕埋め墓の埋葬の仕方は、死者が出ると墓地の端から順番に掘り返